

花水饅頭

『己が孫めは、はあ曹長に進みました』

白毛頭をやつとチョン髷に結ふた六十許りの大柄な爺様。

前は小川、後は菜畑、左は岩山の岩に續いて、その岩から生へてる大松を屋根に背負つた、萱屋葺の小家、すぐ右手は縣道なので、前の川の橋………花水橋を渡つて是非とも此處を通らなければ村にも町にも出られない至つて賣れさうな店である。即ち名物の花水饅頭は此處。だから誰れでも此處を通る旅人は此小店に休んで名物花水饅頭を一つか二つ頬張つて行かない者は無い。

それも此處の爺が自慢話しが面白く話好きな故でも有ろうが、また見晴しが宜くて味もまた格別とやら。

今菜の花は眞盛りである。小川の末は遠く薄墨繪の様で、蝶々が一羽ひらひらと舞つて行く。小店ではまた爺が饅頭焼きながらの孫の自慢話し、客は一人、四十許りの商人躰。『一昨日手紙を超越しやしたがな、何でも其中隊が危険かつた時に、それ孫めが隊長様からの命令で大隊長様の處へ書面持つていったゞそうで、それでやつと中隊が救かつた、さあ首尾よう任務を果したちうかどで曹長に進たゞそうですがすよ アハハハハ なあにこれんばかりは許の事でがすが隊長様のお役に立ったかと思ふと此爺の鼻が高いですがすよ ワハハハハ』

先刻の蝶は何處へやら、今し花水橋を渡つた二人の農夫、何か聲高に語らひながら來掛り、

『やあ爺どんまた始まつたゞか アツハハハハ』とばかり肩の鍬を光らせながら過ぎ去つた。

『ナール程そりや………そして現役かね豫備かね』

煙管をポンと一つ

『なあに豫備でがすよ、去年三年勤務で歸ると間もなく招集られたでがす。普通ならは児童の二人も有る年でがすのよ』

何處の家でか 鶏の鳴聲、アゝと欠伸一つ後の畑から聞えた。

『丈夫で歸つてくりや、直に嫁貰つて呉れべえと思つて今から探してるのがあす アハハハハ』

客も笑つた、饅頭を食ひながら

『婆さんには早く死なれて頼むは彼ばかりですが誠にはや宜く出来やしてな……なあに親は無えですが、今は生きてんだか死んでんだか判明ましねえだ』

日は豫程高くなつた、客は風呂敷包を取つて立ち上つた、と爺の鼻の提灯危険と見る間にポタリと火鉢の縁に落ちて チリ。

『ワッハヽヽヽ 是こそ眞ほんの鼻水饅頭でがすなあ ハヽヽヽ』

底本…「水野仙子全集」第一卷

初出…「女子文壇」明治三十九年一月

テキスト入力…小林 徹

公開…平成二十九年八月十一日

リンク…[水野仙子ホームページ](#)